

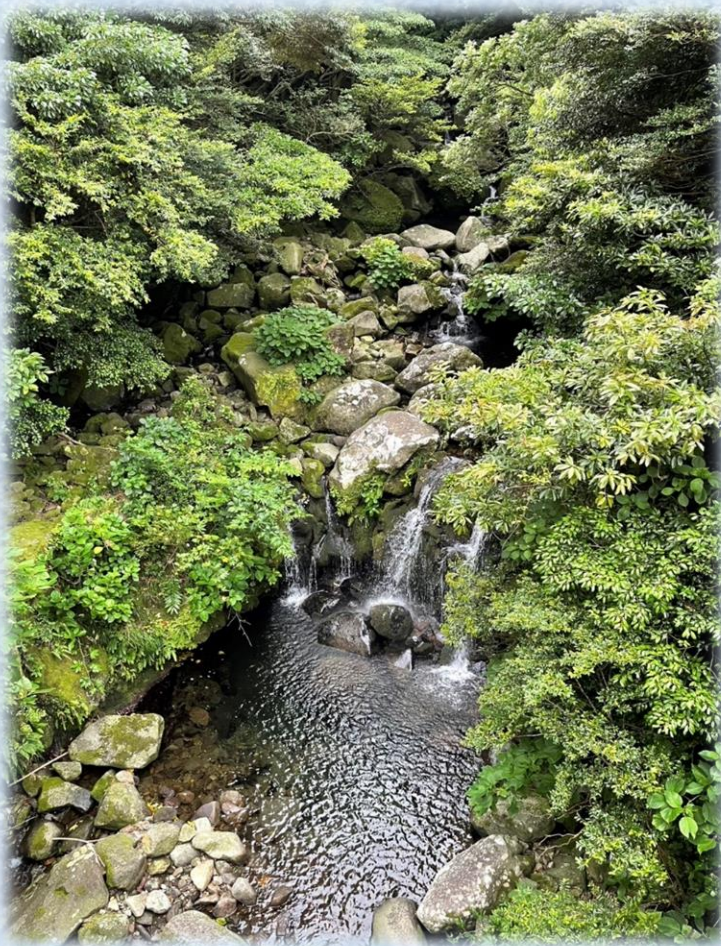
令和 7 年度

へき地・小規模校教育研究発表会

第 28 回 研究発表会資料

研 究 主 題

「主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子供の育成」
～児童・生徒一人一人が他者とながら、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実を目指して～



日時：令和 7 年 8 月 1 日（金） 午後 1 時 30 分から午後 4 時 30 分まで
（受付開始 午後 1 時）

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（カルチャー棟 小ホール）

目 次

I 研究発表資料

御蔵島村立御蔵島小学校	1
-------------	---

八丈町立三原中学校	11
-----------	----

II ヘき地・小規模校の教育について

青梅市教育委員会	21
----------	----

檜原村教育委員会	22
----------	----

奥多摩町教育委員会	23
-----------	----

東京都教育庁大島出張所	24
-------------	----

東京都教育庁三宅出張所	25
-------------	----

東京都教育庁八丈出張所	26
-------------	----

東京都教育庁小笠原出張所	27
--------------	----

9 年間の発達の段階に応じて、自分から進んで努力する

児童・生徒の育成

—言語環境・学習環境の充実を目指して—

御蔵島村立御蔵島小学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

御蔵島は、東京から南方約 200 k m 三宅島南下 18 k m に位置する火山島で、面積は 20 平方 k m のほぼ円形をなし、周囲 40m から最高 480m の断崖絶壁に囲まれた小さな島である。標高 851m の御山をいただく御蔵島は、全島原生林におおわれ多量の水をその地下に留めている。湧出した水は溪流を作り、枯れることなく流れており、動植物に豊かな恵みを与えられている。この原生林が育んだ水は、一般的なミネラルウォーターの 2 倍のミネラルを含み、伊豆諸島屈指の名水として産業の一つとなっている。

ほかにも、島の周辺には野生のミナミハンドウイルカが棲みついており、ドルフィンスイムやイルカウォッチングを楽しむことができる。御蔵島で見られるツゲは、葉が大きく厚く、樹高 5 m もの大木になり、ベンテンツゲと言われている。高級な将棋駒、こけし、印章、櫛等で利用されている。

これらの誇れる自然環境や特産品に幼少期から慣れ親しみ、小学校で深く調べ、まとめることで、他の島へ御蔵島の魅力を伝えている。多くの児童が自らの島に愛着をもち自然や地域の人と関わりながら、生活をしている。

2 学校の概要

本校は、明治 7 年に旧万蔵寺庫裏に小学校を開設。大正 15 年に 2 階建ての校舎を新築。昭和 21 年に校舎が全焼し、それまでの記録がいっさい焼失した。昭和 50 年に小中合同校舎ができ小中併設校となり、行事や委員会などの合同実施が始まる。平成 22 年に黒潮会奉仕活動が東京都教育委員会より表彰を受けた。令和 6 年に小学校設立 150 周年、中学校設立 80 周年を迎えた。

(1) 教育目標

御蔵島小学校は、児童が健康で、知性、感性、道徳心をはぐくみ、人間性豊かに成長することを願い、以下の教育目標を定めている。

自主 自分から進んで努力する子供

協和 きまりを守り 互いに助け合い 協力する子供

健康 明朗で心身ともに健康な子供

(2) 令和7年度の児童数

学級数：6学級

児童数：24名

Ⅱ 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

併設校の中学校生徒は高校進学とともに御蔵島を離れることが多い。学習だけではなく。自分の身の回りを整えることも含め、自分で何事も取り組むことができる力を育てていきたい。そのためにも、子供には御蔵島で生活する間に、自分から進んで努力する力を身に付けていけるよう、学校では指導していくことが大切である。

生活指導部の年間指導計画に基づき、進路や自立に向けた意識を高めることを目的として、「15歳の旅立ち」という指導項目を設定している。これは、学校生活や学習の基礎基本となる内容となっている。小中学校間での連携として小学校では「12歳の進学に向けて」を掲げ、一貫した指導を行っている。自ら進んで努力する力を育てていくために、御蔵島の小・中学校で過ごす9年間では、基礎的・基本的な学習内容を理解し、環境の変化に順応しながら生涯にわたって能動的に学び続けようとする資質・能力育んでいきたい。

2 研究のねらい

(1) 研究の内容と経過

ア 研究の方法

(ア) 研究授業の実施

年4回（9月25日【2学級】、12月2日【2学級】）

(イ) 研究週間の実施

年2回（1週間ずつ）各分科会だけではなく、小・中学校ともに児童の実態や研究内容の共有などを目的として授業観察を行った。

イ 分科会組織

児童・生徒が9年間で学習内容を理解し、環境の変化に順応しながら生涯にわたって能動的に学び続けようとする資質・能力を身に付けるために以下の分科会を発足した。

○自己調整学習分科会

○メディアリテラシー分科会

○課題解決能力分科会

○新聞・図書館活用分科会

(2) 目指す児童像・生徒像（低学年→低、中学年→中、高学年→高、中学生→中学）

ア 自己調整学習分科会

低：目標をもって学習方法を選択し取り組む児童

中：学習方法が整えられたもと、自ら学習計画を立て目標に向かって取り組む児童

高：自ら学習計画を立て、それに合った学習方法を選択し取り組む児童

中学：学習計画をAARサイクル※で見直し、学習方法や環境を整え目標に向かって取り組む生徒

※AARサイクルとは、Anticipation（見通し）、Action（行動）、Reflection（振り返り）の頭文字を取ったもので、学習者が能動的に学びを深めるための学習過程を指す。

イ メディアリテラシー分科会

低：得た情報を真似して、活用できる児童

中：得た情報を参考にして、活用できる児童

高：得た情報を読み解き、取捨選択し、活用できる児童

中学：得た情報をもとに、価値ある情報を積極的に創り出すことができる生徒

ウ 課題解決能力分科会

低：進んで課題解決に向かい、最後まであきらめずに課題を解決しようとする児童

中：学んだことを活かして、課題解決の方法を自分で選ぶことができる児童

高：課題に向き合った学習をして、考えを深めながら、次の学びにつなげようとする児童

中学：課題解決の方法を工夫し、試行錯誤しながら、新たな学びにつなげようとする生徒

エ 新聞・図書館活用分科会

低：読みたい図書を探すことができる児童

中：自分の学習に必要な図書を探すことができる児童

高：本から課題に必要なところを見つけてまとめることができる児童

中学：課題に対して情報を取捨選択し、必要な情報を適切に活用することができる生徒

(3) 研究仮説

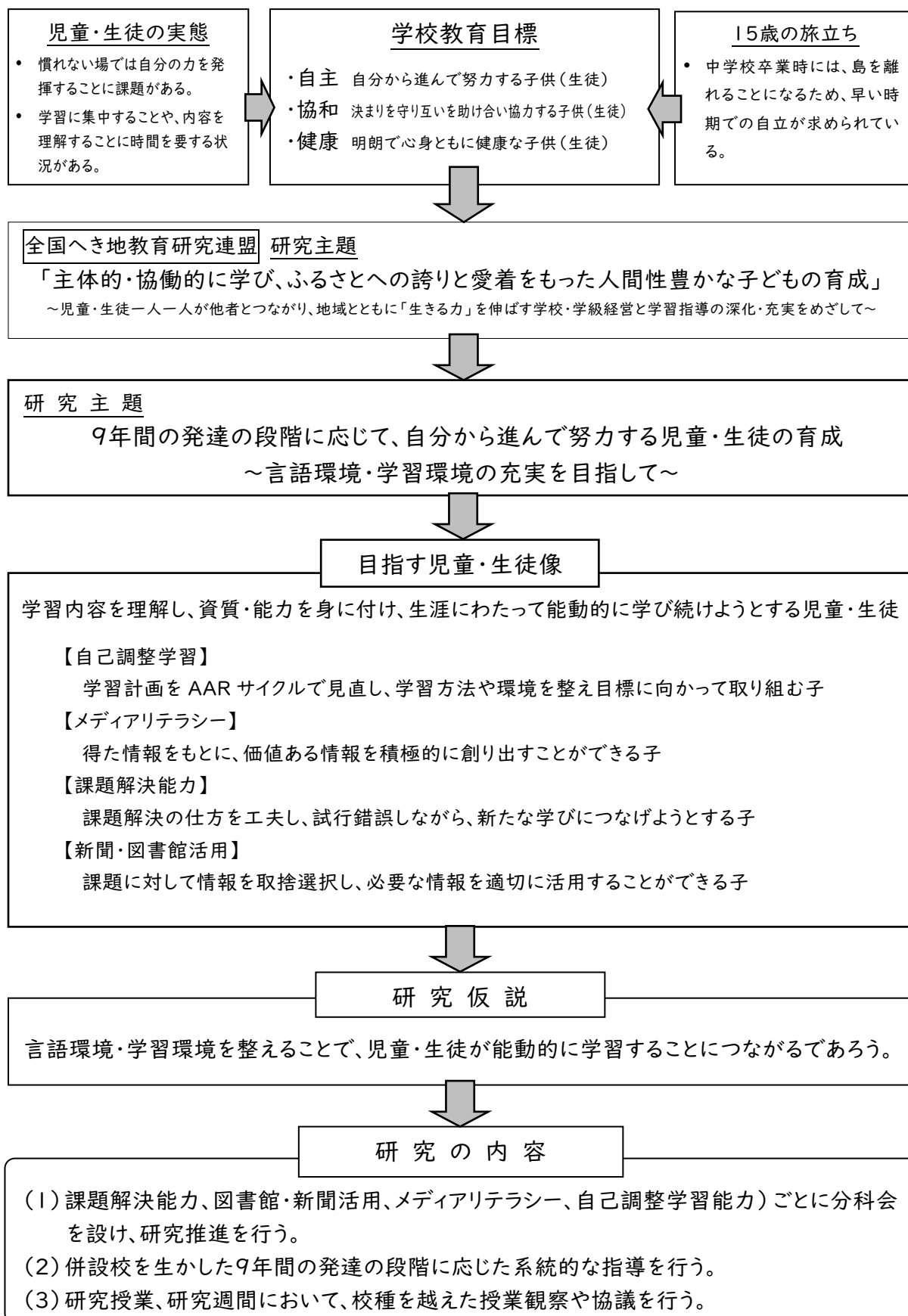
言語環境・学習環境を整えることで、児童・生徒が能動的に学習することにつながるであろう。

なお、「言語環境」とは、言語生活や言語発達にかかわる、文化的、社会的、教育的等の環境。「学習環境」とは、児童・生徒が主体的に学び、対話を通じて深い理解を得るための物理的・心理的な環境といわれている。

これらを踏まえ、本研究では、学校生活全体においては、児童が安心して話し、学び、成長できるように整備された環境を整えることを「言語環境・学習環境」と定義した。

Ⅲ 研究の内容

1 研究の構想図



2 授業実践

(1) 実践事例1 自己調整学習分科会 ～小学校第4学年 国語～

ア 単元名 「もしものときにそなえよう」

イ ねらい

児童が「もしものときにそなえる」という身近で切実なテーマを通して、情報と情報の関係（考えと理由・事例、全体と中心など）を的確に捉え、自分の考えを明確にしながら書き表す力を育成するとともに、学習の見通しをもち、自ら学習計画を立てて能動的に学びを進める力を養う。

ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

(ア) 学習計画を考える時間の設定

授業の導入として、自分のめあてと学習計画を立てる時間を設定することで、全体の見通しをもちながら能動的な学びを促進させた。

(イ) 指導の一貫性

教員がどのような方法で取り組むべきか明確になるよう、国語科「書くこと」の領域での指導に一貫性をもたせた。このことにより、教員と児童、または児童同士の対話を円滑に進ませ、深い理解を得るための環境を整えた。

エ 児童の変容と成果

(ア) 児童がめあてを立てることで能動的に活動に取り組む姿が見られた。学習の目標を明確にもたせたことで、自ら学習計画を意図的に変え、目標に向かって取り組むことができた。また、前時までの学習の目標への達成状況を振り返ることで次時の目標を立てたり、学習計画を見直したりすることができた。

(イ) 指導に一貫性をもたせたことで、児童は学習の流れを理解しやすくなり、能動的に学びに向かう姿勢が育まれた。その結果、自己調整が促進され、学習の進捗を自分で管理し、改善する姿が見られるようになった。

オ 課題と今後の方向性

目標に向かって学習計画を立てても、自分の考えの根拠となる情報を収集することに時間がかかり、計画通りに進めることが難しい児童がいた。活動が遅れている児童への支援として、十分な活動時間の確保に加え、資料やワークシートの準備、学びを支えるための教員の言葉がけの工夫が重要である。

今後は、自分の行動や成果を客観的に評価する時間を十分に確保することで、自身の学びの改善点を見付け、次時への課題へつなげられるよう、時間配分を考える必要がある。

(2) 実践事例2 メディアリテラシー分科会

～小学校第6学年 中学校第1学年 特別の教科 道徳～

ア 単元名 自分を守る力「めざせ！メディアリテラシーの達人」

イ ねらい

児童・生徒がメディアの情報の受け止め方や発信の仕方について考えを深め、情報の影響や価値を見極めながら、他者への思いやりや社会的責任を意識して行動しよう

とする心情を育てる。併せて、得た情報を読み解き、取捨選択して活用する力（小学校第6学年）、価値ある情報を創り出す力（中学校第1学年）を養い、よりよく生きようとする意欲を高める。

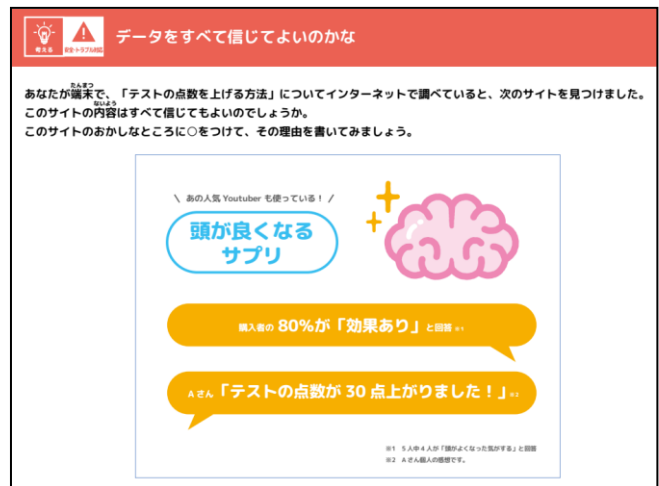
ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

(ア) 異学年交流

より多くの意見を聞く機会につなげるために、小中合同の異学年で意見交流する場を設定した。

(イ) 段階的な学習過程の設定

また、GIGA ワークブック東京を活用し、「調べる→話し合い精査する→まとめる・発信する」の三段階の学習過程を設定して、児童・生徒が自ら考え、判断し、行動できるようにし、能動的な学びを促進することを目指した。



【◎GIGAワークブックとうきょうベーシックより】

エ 児童・生徒の変容と成果

(ア) 他者の意見を聞くことで、自分にはなかった視点や価値観に気づき、情報の受け止め方や発信の仕方についてより深く考えるようになった。

(イ) 段階を踏んで学習を展開することにより、話題とすることが明確になり、話し合いが活発に行われた。また、ねらいに沿って学習を進める中で、情報の内容や意図を丁寧に読み取り、必要な情報を取捨選択して整理し、自分の考えを根拠とともにまとめる姿が見られた。

オ 課題と今後の方向性

意見を引き出せていた場面もあれば、ほとんど発言していない児童・生徒もいた。児童・生徒の性格によるところもあるが、話し合いの人数設定などを改善していく必要がある。

今後は、特別な教科道德の授業で考えるより、もっと合科的にリテラシーを育むようにする。次年度の総合的な学習の時間は、縦割りではなく、学年別に調べる計画とした。それぞれの学年に合ったメディアリテラシーを獲得できるように指導事項を確認し、系統立てた指導が必要である。

(3) 実践事例3 課題解決能力分科会 ～中学校 第2学年 社会科～

ア 単元名 第3部 日本のさまざまな地域 第6節 東北地方

イ ねらい

東北地方の地域的特色や課題について、産業・交通・通信などの事象を多面的・多角的に関連付けて考察する中で、よりよい社会の実現に向けて自ら課題を見だし、解決の方法を工夫しながら試行錯誤を重ねて考えを深め、新たな学びへとつなげよう

とする態度を育てる。

ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

(ア) 生徒の安心感を生むフィードバック

生徒が記録した学習過程や振り返りに対して、記録内容を認めるようなフィードバックを行うことで、安心して学習を進められるようにした。

(イ) 評価基準の提示

能動的な学び姿勢を促進するために、生徒に単元の評価基準を事前に示し、どのような資質・能力を身に付ければよいのかが明確にした。

(ウ) 単元構造の把握と学びの言語化

授業導入時に、単元構想を生徒と共有し、単元の全体像を把握できるようにした。また、毎回の授業で単元を貫く問いに沿った振り返りを行うことで、その日の授業が、単元全体の中でどのような位置づけにあるのかを理解できるようにした。

(エ) 協働的に取り組んだ学習の記録

グループで意見を交換したことを記録させることで、学習内容の理解を深める手立てとした。

エ 生徒の変容と成果

(ア) 学習の記録に対するフィードバックを中心に、生徒一人一人が自身の理解状況に応じた教員からの指導を受け、安心して学習を進めていくことができた。

(イ) 生徒自身がその単元を通して身に付けるべき資質・能力が明確に分かるようになったことで、単元を貫く問いに対して正対したレポートを作成できるようになった。



【クロストーク活動での全体共有】

(ウ) 毎時間の振り返りにおいて、学んだことを言語化することで、学習内容の理解を深めることができた。

(エ) 協働的に取り組んだ学習の記録を生徒個人が取り組む単元末のレポート課題に活用し、全ての生徒がレポートをまとめることができた。

オ 課題と今後の方向性

単元の評価基準を事前に示すことで、能動的な学びを制限し、学びの促進を妨げている可能性がある。生徒の多様な視点やアプローチを評価できる評価基準の設定が必要である。

(4) 実践事例 4 課題解決能力分科会 ～小学校第3学年 学習環境～

ア 常時活動

学習環境の工夫による能動的な学びの育成

イ ねらい

学習に関連する資料を活用しながら、既習事項をもとに課題を見付け、自分に合った学習方法を選んで取り組むことで、考えを深める力を育てる。

ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

- (ア) 辞書や一人1台端末をいつでも活用できるようにし、単元に関連する図書資料を教室に配置することで、児童が必要をすぐに調べられる環境を整備した。
- (イ) 学習内容に応じて児童が学習方法を自己決定できるようにし、個別学習・グループ学習などの形態を選べるようにした。
- (ウ) 算数の学習用語を教室に掲示するなど、既習事項を想起しやすい環境を整備した。
- (エ) 話し合いや発表の場面で話型を活用することで、児童が互いに学び合う姿勢を高め、考えを深める学習環境を整えた。

エ 児童の変容と成果

- (ア) 児童が自ら調べたり、学習方法を選んだりするなど、能動的な学びが促進された。
- (イ) 児童が学び方を選ぶことで、理解度や関心に応じた方法で取り組むことができ、学びの質が高まった。
- (ウ) 掲示された学習用語を活用して、児童同士の話し合いや発表が活性化し、課題解決だけでなく次の課題を見付ける姿が見られた。
- (エ) 話型の活用により、児童が互いの考えに耳を傾け、共に学び合う姿勢が高まり、自分の考えを広げ深めることができた。

オ 課題と今後の方向性

課題の解決方法や見通しをもたせるためには、児童が話し合ったり考えたりする際の視点を、より明確にする必要がある。また、伝え合いを大切にした学習を進めるためには、児童の発達の段階や教科の特性に応じて話型をさらに整備していく必要がある。

(5) 実践事例5 図書館・新聞活用分科会 ～中学校全学年 英語～

ア 単元名 NEW CROWN English series3 Lesson3 USE write
「おすすめの本を紹介しよう」

イ ねらい

自分のおすすめの本を英語で紹介する活動を通して、目的に応じて情報を取捨選択し、必要な情報を整理・構成して、相手に伝わるように英語で発信する力を育てる。

ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

(ア) 習熟度に応じた図書選び

自分の習熟度に合わせた英語の本を選書できるように、図書館の英語絵本を難易度別に分けて整理し、学習環境の整備を行った。

(イ) 情報の信頼性を見極めた資料活用

インターネットに書かれている記事だけであると、正しい内容であることが確かめられないことから、現在完了形の「完了」用法の文法を調べる際は、英和辞典を活用し、文法について調べる資料として用いた。

エ 児童・生徒の変容と成果

- (ア) 生徒の反応はとてもよく、「英語本は難しいけれど読んでみると面白い。」という感想があった。自分の興味・関心及び、習熟度にあった英語の本を選ぶことで、

英語本に対する抵抗感を取り除くことができたと考えられる。

- (イ) 英和辞典の書かれてある文法の説明を基に生徒一人一人がレポートを作成し、理解を深めることができた。

オ 課題と今後の方向性

単元によっては図書を活用する題材が多くあり、教員が授業内で積極的に図書を活用し、生徒の知識や理解を深めるツールとして使用する必要がある。

また、英和辞典の活用が語彙習得や情報を正しく取捨選択する練習に役立つため、単元でそのような場面を設定することが重要である。

今後は、図書館を授業内で引き続き活用し、生徒の学びを深めることが求められるが、学級内で新聞を活用することができなかったため、新聞を読む意味や学びにつながる点を伝えた上で、新聞をじっくり読む時間を取る必要がある。



【英語絵本おすすめ紹介】

(6) 実践事例6 図書館・新聞活用分科会 ～小学校第2学年～

ア 常時活動

読書活動を通して興味関心を広げる学習環境の工夫

イ ねらい

児童が読書に親しみ、興味関心を広げながら、自分に合った本を選ぶ力を育てる。

ウ 言語環境・学習環境を整備する手立て

- (ア) 図書室の本を教室の学級文庫に紹介したり、博報堂教育財団の「お気に入りの一冊をあなたへ」の紹介文を活用したりすることで、児童が本に親しみやすくなるよう工夫した。
- (イ) 小学生新聞の話題やクイズを通して、本や新聞に対する児童の関心を広げるきっかけをつくった。また、新聞の切り抜きを校内に掲示するなどして、児童が新聞に触れる機会を確保する工夫を行った。
- (ウ) 毎週の図書室利用を継続したり、読書記録の目標提示や声掛けをしたりすることにより、読書への意欲を高める環境を整えた。

エ 児童の変容と成果

- (ア) 学級文庫に並んだ本が身近に感じられ、自然と本を手取る姿が増えた。
- (イ) 活字に親しむ習慣が育ち、日常的に読む姿が見られるようになった。また、読むことが「楽しい活動」として定着するようになった。また、掲示された記事に興味をもち、記事の内容について友達や先生と話題にするなど、社会の出来事に関心をもつ姿が見られた。
- (ウ) 毎週の図書室利用を継続することで、児童は図書室の本の配置や自分の読書の好みに気付き、本を選ぶ時間が短縮され、読書時間が増えた。読書への抵抗感がなくなり、空いた時間に進んで本を読む姿が見られるようになった。

オ 課題と今後の方向性

読書や活用のための図書の選択が偏る傾向があるため、教師から様々な内容の図書を随時提示していく必要がある。また、図書室の本の配置や分類について理解が進んでいることから、今後は授業で扱う題材に関連する本を児童自身が探して選ぶ活動へと発展させていくことが求められる。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) めあてと学習計画を考える時間

単元を通して、自分でめあてを明確にもたせる時間を設けたことで、能動的に学習に取り組む、学習の進め方や課題を自ら選択しようとする意識をもたせることができた。また、児童・生徒は、学習が進む中で自身が立てた学習計画を修正する姿が見られた。

(2) 変容や課題の把握

新聞や図書館活用のきっかけ作りや単元を通しての課題解決の実践例、有益なメディア活用の理解の広がり、自己調整学習の環境作りに取り組むことで、児童の「能動的に学び続けようとする」変容や課題を把握することができた。

学習環境において、単元の目標を明確に提示し、見通しをもった学習計画を立てるようにすることや辞書や一人1台端末、ベン図やXチャートなどの、いわゆる思考ツールなどをいつでも自由に活用できるようにすることで、学習内容に応じた計画的な学習計画を立てたうえで、学習方法を自己決定できるようにした。また、クラスや異学年間で学習内容や進度の相互確認をすることで、自己分析する時間を設定し、自己調整できるようにした。児童に調べる方法や、個別学習・グループ学習などの学習形態を選ばせることで、主体的かつ児童の習熟度に合わせた学びにつなげた。

2 今後の課題

(1) 児童・生徒が効率的に学習計画を立てる指導

課題設定や資料選び、学習計画の作成には、時間がかかることから、教員の支援を更に充実させる必要がある。全ての児童・生徒が見通しをもって主体的に学習するために、発問や活動の方法等を更に吟味して取り組む必要がある。

(2) 目指す児童・生徒像の整理

実践を通して得た成果を受けて、段階的に何を身につけるのかを明確に示していく必要がある。発達の段階に応じた学びを通じて「何ができるようになるのか」という視点から、育成すべき資質・能力を整理する必要がある。その上で、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶのか」という、必要な指導内容を検討し、その内容を「どのように学ぶのか」という、児童・生徒の具体的な学びの姿を構成していく必要がある。

(3) 研究方法の検討（分科会の在り方について）

各分科会の研究内容の捉え方が多岐にわたるため、それぞれの領域の中でも研究内容をしばっていく必要があることが分かった。また、担任は学年がすべて違うため、該当学年ではどのように授業をすればよいか話し合うまでは至らなかった。分科会の構成の仕方もさらに検討していく。

子供の学びの原動力を育む取組

—各教科等での探究的な学びの充実—

八丈町立三原中学校

I 地域及び学校の概要

1 地域の概要

八丈島は東京都心から南方約287kmに位置し、面積69.11km²、周囲58.91kmのひょうたん形の島である。人口は6,813人、世帯は4,108世帯である。（令和7年3月1日現在）

島の南東部に位置する三原山を中心とする檜立、中之郷、末吉で形成される坂上地区と、島の北部に位置する永郷地区及び八丈富士と三原山の間にある大賀郷、三根で形成される坂下地区がある。坂上地区には、小学校1校と中学校1校（三原小学校、三原中学校）があり、坂下地区には、小学校2校と中学校2校（三根小学校、大賀郷小学校、富士中学校、大賀郷中学校）、都立八丈高等学校及び都立青鳥特別支援学校八丈分教室がある。

2 学校の概要

本校は、平成14年4月に八丈町立末吉中学校と統合し、その後、平成30年に隣接する三原小学校とともに、小中一貫型教育校「三原学園」として新たにスタートした。異学年交流や小学校の教員と中学校の教員とが協力して行う授業などを通じて、児童・生徒や教員が互いの校舎を行き来する姿が日常的に見られ、活発に小中学校の交流が行われている。

II 研究主題の設定理由と研究のねらい

1 研究主題の設定理由

本校は、学校教育目標を「やさしい人」「たくましい人」「よく学ぶ人」を掲げている。この学校教育目標に基づき、「自他の幸せを追求し、よく考え行動できる生徒」を目指す子供の姿としている。このことは、これからの予測不可能な未来に対して、生徒一人一人が主体的に向き合って関わり合い、より良い社会と幸福な人生を自ら創り出していくために必要な資質・能力である。そして、これらの資質・能力を育成することで、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考える。

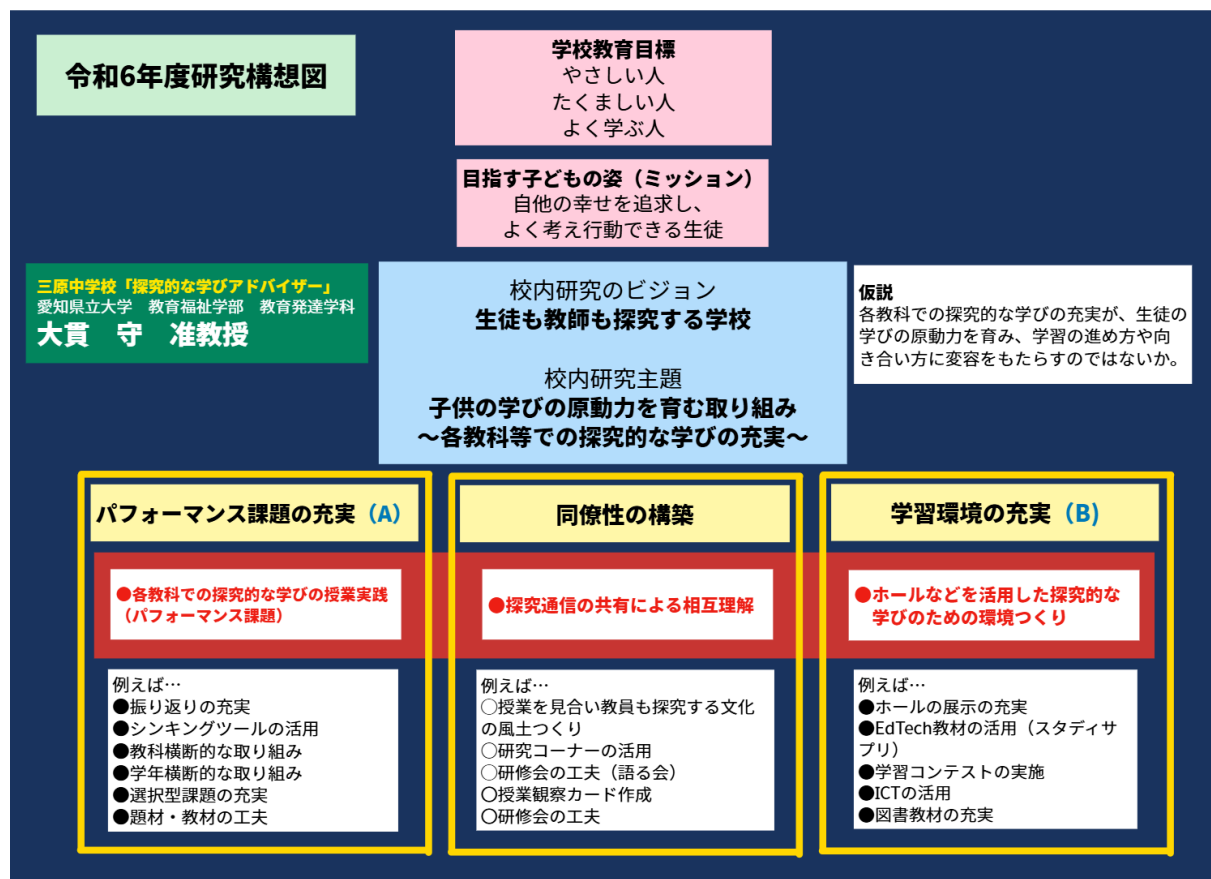
そのためには、三原中学校の教職員が学ぶ姿勢を生徒に見せるとともに、理論による実践の裏付けが重要である。そこで、校内研究のビジョンを「生徒も教師も探究する学校」とした。このビジョンを具現化するために、「子供の学びの原動力を育む取組～各教科での探究的な学びの充実～」を研究主題として設定した。

2 研究のねらい

本研究では、各教科等における探究的な学びの充実をとおして、生徒の学習への主体性を高めることをねらいとした。そのために、子供の学びの原動力を育む取組として、「パフォーマンス課題の充実」、「学習環境の充実」、「同僚性の構築」を研究の柱に据え、実践を重ね、成果と課題を明らかにしながら、研究主題の実現を目指すこととした。

Ⅲ 研究の内容

1 研究の構想図



上記の図は、令和6年度研究構想図である。校内研究のビジョン、研究主題に迫る手立てとして、大きく3つの柱を立てた。それらの柱ごとに分科会を設け、探究的な学びの充実に向けた取組を進めた。校内研究を進めるにあたり、愛知県立大学准教授大貫守先生を探究的な学びのアドバイザーとして迎え、御指導をいただいた。

「パフォーマンス課題の充実（A分科会）」と「学習環境の充実（B分科会）」では、授業実践、教室や共有スペースの有効的な活用方法など学習環境の充実に向けた方策について研究を重ねた。

また、研究主題に迫る手立てとして、生徒と教師が共に学び合う環境を作り出すことが大切であると考えた。そのためには、「同僚性の構築」を推進する組織が必要であると考え、研修推進委員会がその役割を担い、委員会の取組を研究の柱の一つとして位置付けた。特に教員同士の協力体制を強化して、研究活動を円滑に進める土台づくりを行った。これらの取組を通して、生徒の「〇〇したい！」という学習への主体性を高めることを目指し、学校全体で探究的な学びの実現を図ることとした。

2 研究の方法と手順

令和6年度、職員を対象に行ったアンケート結果から、生徒の学習への主体性は十分に発揮されていないという実態が明らかになった。この結果に対し、「探究的な学びを充実させることで、『学びの原動力』を高められる可能性がある。」との仮説を立て、以下の流れで研究を進めた。

(1) 昨年度までの実践の整理

これまでの校内研究で行った実践を整理し、生徒の学びの変化や課題を分析した。その結果をもとに、研究を進めるための方法を3つの柱で整理した。

(2) 研究の実践方法

ア パフォーマンス課題の充実（A分科会）

生徒の「学びの原動力」を育めるよう探究的な学びを深める工夫として、具体的なパフォーマンス課題を設計した。

イ 学習環境の整備（B分科会）

「学びの原動力」を育めるように学習環境を整備として、教室内外の空間づくりを行った。

ウ 同僚性の構築（研究推進委員会が担当）

教員同士の連携を強化し、効果的な研究活動を進めるための体制づくりを行った。

(3) 検証手段

以下の方法をとおして、探究的な学びの充実として行った「パフォーマンス課題」と「学習環境の整備」が生徒の「学習の原動力」を育むことにどのような影響を与えたかを検証した。生徒のエピソード記録はチャットアプリを用いた。

ア アンケート調査

教師及び生徒を対象としたアンケートを実施し、学習への主体性の変化を測定した。アンケートではオンラインフォームを使用し、全校生徒に年3回の調査を実施した。

イ エピソード分析

抽出した生徒の学びの様子を記録し、その変化を詳細に分析した。



【ワークシート3】 パフォーマンス課題づくり用ワークシート：パフォーマンス課題を考えてみましょう！

教科(科目)：家庭科 学年：2年生 名前：小山 里歩

単元：食生活(1日分の献立作成)

①「本質的な問い」 ◎健康的な生活を送るためには、どのような食生活を送ればよいのか。 ○1日に必要な栄養素を摂取するためには、どのような献立を立てるべきか。	②「系統的理解」 ・健康的な食生活とは、自分自身に必要な栄養を満たす食事を選び摂取して健康に過ごすことである。 ・食品には様々な栄養素が含まれ、バランスよく摂取することで健康を維持できる。
半包摂的な「本質的な問い」に○, 半分の「本質的な問い」に◎を付けましょう。	
③パフォーマンス課題のシナリオに盛り込む要素 (GRASPS)	
目的(Goal): 1日の食事摂取基準の1/3を満たす献立を考案する	
役割(Role): 八丈町の栄養士	
相手(Audience): 全国学校給食甲子園の審査員	
状況(Situation): 全国学校給食甲子園に八丈島代表として参加し、優勝を目指す。 八丈島の特産品を生かした献立を作成する。	
作品(Product, Performance): プレゼンテーション	
観点(Standards): 食品群別摂取量のめやすの1/3を満たしているか、八丈島の特産品を使用しているか	

パフォーマンス課題
あなたは八丈町の栄養士として今年の12月に開催される全国学校給食甲子園に「地産地消」をテーマとした給食の献立を出品することになりました。給食(1食分)の献立を考え、その献立の魅力が十分に伝わるスライド資料を作成し、審査員に向けて発表しましょう。なお、栄養バランスがよく、八丈島の特産品を使用した献立を作成しましょう。

(パフォーマンス課題づくり)

3 実践報告

(1) 「パフォーマンス課題」の設定（A分科会）

ア 教員の「パフォーマンス課題」の理解

A分科会では、探究的な学びを深めるために、「パフォーマンス課題」に焦点を当てた取り組みを進めてきた。

本校の研究では、愛知県立大学准教授大貫守先生に指導・助言を仰いだ。先生の理論と実践の中で、「パフォーマンス課題」の重要性について御講義をいただいた。大貫先生によると、「パフォーマンス課題」とは、知識やスキルを統合して活用し、現実的な文脈で問題を解決することを求める課題ということである。「パフォーマンス課題」が発展してきた背景として、1980～1990年代のアメリカで、標準テストが子供の学力を総合的に評価できないとの批判から、リアルさや現実味を重視する「真正性」のある評価が重要視されるようになったという歴史がある。この考え方を基に、A分科会では「真正性」を重視し、生徒が知識を実生活に活用できるような課題を開発することを目指した。

令和6年4月に、全教員を対象に「パフォーマンス課題」についての研修会を実施した。講師の大貫先生からは、パフォーマンス課題の理論と実践についてご教示いただいた。特に、「本質的な問い」と「永続的理解」を基に、単元全体の学習計画をこれまでとは違う視点（逆向き設計）で構築する方法を学んだ。

研修後、各教員は自分が担当する教科におけるパフォーマンス課題を作成し、全教員で共有する機会を設けた。

イ 「地域資源を生かしたパフォーマンス課題」を設定した授業

本研究では、全ての教科で「パフォーマンス課題」を設定した。ここでは特に、島しょ地域の特色を生かした実践事例を紹介する。

第1学年の技術・家庭の技術分野では、地域との連携や、島しょの特色を活かした体験をとおして、生徒が生産者としての視点を持ち、消費者ニーズに応じた野菜栽培計画を立てることを目的として実践に取り組んだ。その中で、美術科との教科等横断的な視点を取り入れた「パフォーマンス課題」を設定した。

「皆さんは、7月中旬に地域の商店で夏野菜の販売を行うことになりました。店主からは、『店で欠かせない夏野菜もほしいけれど、珍しい夏野菜もほしい。』というリクエストがあり、きゅうりとハラペーニョの栽培を担当することになりました。生産者の立場から、消費者のことを考えながら、育てる野菜の育成計画をそれぞれ立てましょう。」

生徒は、単元の導入時に提示されたこの「パフォーマンス課題」に対して、これまでに育ててきたラディッシュの実験結果や、前年度の土壌分析結果をもとに、栽培する野菜に適した土壌環境について考察した。その後、過去の生徒の栽培実践を振り返り、成功例や失敗例を分析して対策を検討した。また、その後の学習活動の中では、以下の流れで実施した。

- (ア) 土壌分析結果から、足りない要素を見いだす。
- (イ) 必要な肥料を選定する。数学科の「データの活用」の単元と関連づけ、適切な肥料の量を決定する。
- (ウ) 土壌改良の方針についてプレゼンテーションを行う。
- (エ) 実際に土壌改良作業を行い、育成に向けた準備を整える。



(パフォーマンス課題の授業の様子)

本実践では、地域の商店との連携により、地元の実需に基づく現実的な課題設定が可能となり、生徒は生産者の立場から消費者の要望を踏まえた栽培計画の立案を行うことができた。また、校地の広さを生かし、実際の圃場での体験学習が行われた。これらの取組を通じて、生徒は自らの学びを生活や地域と結びつけながら実感し、より主体性を高めて学習に取り組む姿が見られた。

美術科では、技術・家庭の技術分野での取組を受けて次のような課題を設定した。

技術・家庭の技術分野で育てた野菜を販売することになった。そこで、「多くの人が手に取り」、「その野菜の特徴や魅力が伝わる」ようなパッケージシールをデザインしよう。

本実践では、生徒は自分たちがデザインしたシールが実際に商品として店頭に並ぶことを意識しながら学習に臨んでおり、シールが完成するまでを課題としている。

ウ 実践の成果

アンケート結果及び授業中の生徒の発言等から、「パフォーマンス課題」に取り組むことへの意欲や主体性が明らかに高まっていることが確認できた。

エ その他の教科のパフォーマンス課題について（各教科ではパフォーマンス課題を複数回実施しているが、そのうちの一例）

教科	本質的な問い	永続的理解	パフォーマンス課題
国語	どうすれば言葉に敏感に反応し、言葉の裏にある意味を深く考え、イメージを膨らませることができるか。 それを理解した上で、短歌を作成することができるか。	時に短歌でも使ってみようと思ったとき、学んだことを生かし流暢な歌が作れる。	有名な歌人になるための登竜門、現代歌人コンクールに応募することになりました。 今までの学習をもとに、誰もが素敵だなあと思うような歌を作ってください。
社会	地球規模で発生している諸問題に、世界は、そして日本はどのように対応しているのだろうか。また、自分はこれらの諸問題にどのように向き合うべきだろうか。	地球規模で諸問題している問題にはどのようなものがあり、それらはどのようなことが原因で発生しているかを理解する。 また、それらの問題解決のために、国際連合をはじめとする国際機構がどのように取り組んでいるか、日本として、また自分自身としてこの問題にどのように向き合っていくべきかを考察し説明することができる。	あなたは、国際連合で働く職員です。そこで（国際平和と軍縮／環境・エネルギー／南北問題／人権保障）に関する仕事をしています。ある時、母校である中学校の生徒とオンライン授業を行うこととなり、あなたが取り組んでいる国際社会の課題について話することとなりました。 次の点に留意して、授業の冒頭で使用する3分程度のプレゼンテーション資料をつくりましょう。

(2) 学習環境の充実（B分科会）

B分科会では、空間と人工物の整備について特に焦点を当て、研究を進めた。本校には、教室の外にある広い空間「シェアハピ」と、玄関ホールの地域交流スペース「オリトラ」がある。これらは、普通教室や特別教室をつなぐ役割や、学校と外部をつなぐ「ハブ」（学習の拠点）としての可能性をもつ場所である。

「シェアハピ」と「オリトラ」を「学ぶ楽しさに気付ける空間」、「教科等横断的な気づきが得られる空間」、「『もっと知りたい。』と思うきっかけを得られる空間」、「居心地がよく、集中できる空間」、「自然と人が集まり、情報共有や議論、学び合いが起こる空間」にすることを目標に掲げた。

ア 「シェアハピ」の工夫

「シェアハピ」には、「パフォーマンス課題」の成果物や、生徒が興味をもつアイテムを設置した。

例えば、数学の授業で取り組んだルービックキューブや、人気漫画の英語版、体を鍛える「ミハライズ」コーナー、進路に関する本が並ぶ「卒業したらどうするか。」コーナーなどがある。

生徒が自由に集まり、探究に向けた議論や活動を行えるよう、円形テーブルや座りやすい椅子、陳列棚などを新たに設置した。

イ 「オリトラ」の工夫

「オリトラ」には、生徒や来校した地域の人たちが集まることができるように、元々あった下駄箱を撤去し、小上がりとドーナツ型のテーブル作成し設置した。

また、生徒が八丈島の文化などに日常的にふれることができるように、八丈太鼓や、地域から寄付された碁盤などを新たに設置した。

ウ 結果

生徒は「シェアハピ」で展示された「パフォーマンス課題」を見て、先輩や仲間の取組に興味をもったり、学習への意欲を高めたりしている様子がうかがえた。また、「シェアハピで新しい発見をした。」、「興味が湧くものがたくさんある。」といった感想が生徒アンケートで複数寄せられた。



（オリトラでの生徒会活動）



（全学年での合同授業）



（シェアハピの出張図書室）



（体を鍛えるミハライズ）

(3) 同僚性の構築について（研修推進委員会）

ア 研究通信の発行

年間30号を目標に研究通信を発行している。この研究通信では、「校内研究に関連する内容」、「校内の先生たちの授業実践の共有」、「話題の教育トピックの紹介」を主な内容として取り上げた。「明日の授業から使える内容」から「研究の根幹に関わる理論的な話」まで幅広く取り上げた。

イ 教員の対話を促進する研修会の実施

教員が探究的な学びについて自由に語り合える場を設け、小グループで意見交換を行う研修会を実施した。この場では、各教員が自ら探究した経験を共有し、探究的な授業を実現するためのヒントを得た。



（校内研修会）

ウ 職員室に「研究コーナー」を設置

職員室内に「研究コーナー」を設置し、教員が自由に利用できる空間を整備した。このコーナーには、探究的な授業の改善に役立つ書籍や資料をまとめて配置した。



（職員室の研究コーナー）

エ チャットアプリの活用

教師の情報共有とコミュニケーションを円滑にするため、チャットアプリを活用した。チャットを通じて、取組の記録や意見を共有し、共通の課題や目標について話し合いやすい環境を構築した。リアルタイムで進捗を共有したり情報を交換したりすることが可能となった。

オ 結果

研究通信の発行をとおして、教員が共通の認識をもって校内研究を進めることにつながった。研究通信は過去の号も含め、他校の研究担当者とも共有し、校内外での学びの広がりにも寄与している。

教員の対話を促進する研修会の実施は、フラットな対話を通じて、教員同士が新たな視点を獲得だけでなく、共通の課題や目標について深く考える契機となった。

職員室に「研究コーナー」を設置は、教員が必要な情報や資料に簡単にアクセスできるようにし、学びを支援する環境を整えた。

チャットアプリの活用は、紙ベースのやりとりや対面での確認が減少し、業務の効率化にもつながった。

これらの取組により、校内研究に対する教員の共通認識が深まり、職員室内での対話も活性化した。同僚性の構築が進むことで、教員一人ひとりが学びやすい環境を整えることができた。また、教員自身が探究的な学びを進めることで、教員間で協働的に学び合う土台を築き、探究的な授業づくりを実現する一助となった。

IV 研究の成果と今後の課題

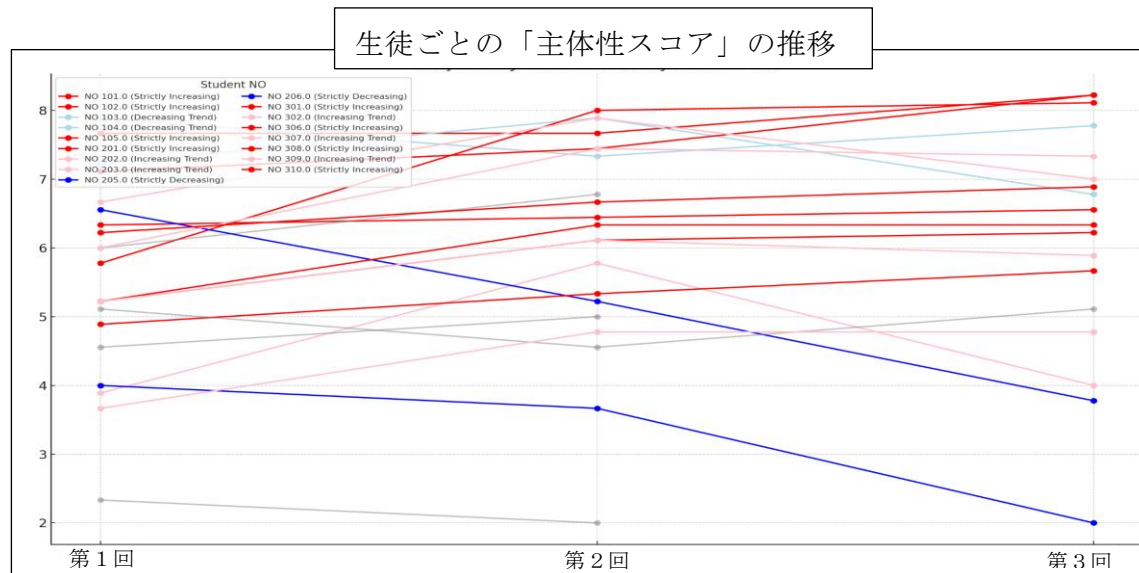
1 研究の成果

(1) 学習アンケートの結果

本研究では、生徒の学習に対する姿勢や取組を把握することを目的として、学習アンケートを3回実施した。このアンケートでは、18項目の質問を設定し、「学びに対する取組」に関する9項目について、生徒が10段階で自己評価を行った。この生徒ごとの自己評価の平均値を「主体性スコア」として、この結果について分析した。

ア 生徒ごとの「主体性スコア」の推移

第1回から第3回までの学習アンケートにおける「主体性スコア」の推移を分析した。スコアが増加した生徒が全体の約41%（赤い線）であったが、スコアが減少した生徒は約12%（青い線）であった。これにより、全体として、生徒の主体性の向上が見られ、校内研究における取組が一定の成果を上げていることが分かった。



(2) 生徒アンケートの自由記述と教員が記録した生徒のエピソードの分析

生徒アンケートの自由記述と教員の授業記録をもとに、生徒のエピソードを分析した結果、「パフォーマンス課題」をととして生徒が主体性を高めて、試行錯誤を重ねる姿が確認された。

ア 生徒アンケートの自由記述の抜粋

- ・「自分がどれくらいその単元の学びが身に付いているのかよくわかって良いです。」
- ・「発表の仕方にも工夫しがいがあります。」
- ・「考えることが多く、苦戦しました。」

これらの記述から、生徒が「パフォーマンス課題」に主体的に取り組んでいることが分かった。

イ 教員による授業記録

(ア) 数学の授業（令和6年12月5日実施）

円周角を利用した作図問題に取り組む中で、生徒は最後の難問に協力して挑んだ。

授業後には「さっきの問題のやり方をもう一度教えて」と、生徒同士が教え合う場面が見られた。

12/5⑤数学の授業

円周角を利用した作図の問題で、最後の難問に正解した[]、[]、[]、[]、[]の5人のやり方が全員違ったのでお互いにやり方の共有を授業の最後に行った。

授業後の休み時間に、[]が[]に「さっきの問題の[]のやり方もう一度教えて」とやり方を聞きに行っていた。

同様の現象が[]と[]にも起きていた。
教え合いが自然に発生していて嬉しかったです。

また、他の生徒も自然と協力し合い、問題解決の過程を共有する姿が見られた。このエピソードは、主体性が高まり、学習を通じた相互支援の姿勢が強まったことがうかがえる。

(イ) 理科の授業でのきのこ観察（令和6年10月3日）

ある生徒が「先生、きのこを持ってきたので調べましょう。」と提案し、授業で学んだ菌類についての知識を活用して行動を起こした。これをきっかけに、クラス全員で観察活動を実施し、画像検索ツールを活用して調査を進めた。この活動を通じ、生徒たちは単なる知識の習得を超えて、学びを広げる経験を得ることができた。

10/3 3年きのこを持ってきた

[]さんが授業の前に「先生！きのこを持ってきたんで調べましょう！」と差し出す。どうして持ってきてくれたの？と聞くと、「ちょっと前に菌類を授業でやってちょうど通学路にキノコが生えてたので持ってきました。」

「どうせなら調べましょうよー！」

となり、30分を使って図鑑班と顕微鏡班に分かれて調査活動を実施しました。その結果ヒダハタケなのでは？ということが分かりました。生徒もタブレットの画像検索だけでなく、観察と図鑑を使うことの有用性を確かめることができたようでした。

これらのエピソードや自由記述から、「パフォーマンス課題」を設定した授業や、学習環境を工夫などより、生徒の「学びの原動力」が向上し、自らの学びを広げる姿につながったと捉えている。また、生徒が学習内容を実生活や新たな学びに結び付ける姿勢を育んでいる点も、本研究の重要な成果であると考えられる。

(3) 教員の研修後のアンケートより

研修後に実施した教員アンケートの自由記述から、教員が試行錯誤を重ねながら授業改善に取り組んでいる様子が分かった。アンケートの主な記述を以下にまとめる。

ア 「パフォーマンス課題」の設定による効果

「やるべきことが明確になり、授業の進め方が見通しやすくなった。」という意見があり、「パフォーマンス課題」の適切な設計が授業の進行や目標の明確化につながることが分かった。

イ 生徒の様子を観察する重要性

「生徒の主体性を育むには、やりすぎず適度な支援を行う必要がある。」という意見が見られ、教員が生徒への支援と自律性のバランスを模索していた。この記述は、

生徒一人ひとりの学びを支援するための教員の取組を示している。

(4) 成果

各教科で「パフォーマンス課題」を設定した授業実践を行ったことで、生徒が学習に主体的に取り組むことができた。このことは、「学びの原動力」につながり、探究的な学びの実現に大きく寄与したと考える。さらに、「学びの原動力」を高める空間づくりが、身近なものへの関心を高めるきっかけや協働的に学ぶ土壌づくりにつながった。

また、教員も探究する姿勢を示すことで、生徒の探究心を育む手本となり、共に学び合う環境を作り出すことにつながっていると考える。本研究をとおして、学校全体で探究する文化が醸成されてきていることが成果である。

2 今後の課題

本研究をとおして、生徒の学習への主体性や教員の授業改善への意識向上など、一定の成果が得られた一方で、いくつかの課題も明らかとなった。

(1) 主体性が低下している生徒への対応

アンケート結果やエピソード記録から、多くの生徒が学びへの主体性を高めていることが確認されたが、一部では主体性が低下している生徒も見受けられた。このような生徒への支援を強化し、個別のニーズに応じた学びの機会を提供することが課題である。

(2) 「カリキュラム・マネジメント」の視点に立った教育課程の編成

各教科で取り組んできた探究的な学びを、本校の教育活動全体で取り組んでいけるよう、「カリキュラム・マネジメント」の視点に立った教育課程の編成に生かし、教科等横断的な視点で学びを深化させる必要がある。生徒が教科を超えて学びをつなぎ、自らの興味や関心を広げていく仕組みづくりが今後の課題である。

(3) 探究的な学びを学校文化として定着させる

本研究の取組を継続し、探究的な学びを学校の文化として定着させることが目標である。教職員全員が一つとなって探究的な学びを推進する体制を構築することが必要である。また、生徒が日常的に主体性を発揮できる環境を整備し、学校全体で探究的な学びが自然に行われる文化を育むことが課題である。

これらの成果と課題を踏まえ、さらなる学びの深化と改善に向けた取り組みを進めていく。主体性を育む教育環境の構築、探究的な学びの横断的な活用、そして学校全体での文化の定着を目指し、これからも継続的な研究を行っていく。

青梅市教育委員会

1 青梅市の紹介

東京都の多摩西部地域に位置し、東京都の2市3町と、埼玉県の2市の合計7市町と隣接している。多摩川が市内のほぼ中央を西部から東部へ貫流し、北部には入間川の支流である霞川と成木川が流れている。東部の平地から、丘陵地、山地へと変化し、最高点は鍋割山の1,084メートルである。管内には小学校が17校、中学校が11校あり、教職員数は約1,000人、児童数は約5,000人、生徒数は約2,700人である。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 青梅市立第六中学校

丘陵地と山地の合間の盆地状の地に位置し、校舎脇に小川が流れる自然に恵まれた環境の中で、生徒は意欲的に生き生きとした生活を送っている。その中で本年度は、「自主創造」という基本理念、また「振り返る、見通す、やり抜く」という行動目標の下で、「主体性」や「主体的な学び」の醸成を教育方針の重点とし、以下の取組を実践している。

ア 地域の「資源」を活用した「総合的な学習の時間」の取組

特有の自然と歴史、文化をもつ地域性を生かした学習活動により、「主体的・対話的で深い学び」を実践する。また、防災訓練や青少年健全育成地区委員会への協力、地域人材をゲストティーチャーとするなど地域と連携し、郷土・地域に主体的に関わろうとする教育を展開している。



(探究活動)

イ 調べる学習から考える学習へ

「課題の発見・設定」、「情報収集」、「整理・分析」、「考察」、「表現」といった一連の探究の手法をもとに、生徒が自らの学習状況を把握し、個々の探究テーマに対し粘り強く探究活動を行い、考えを形成する力・態度を育成する教育活動を推進している。

(2) 青梅市立第七中学校

成木川とその支流の北小曾木川の溪流沿いに位置し、青梅市の学校で最も広い学区域をもつ。その多くは山林で市街化調整区域に指定されており、人口の流入はほとんどない。校庭にはホタルも生息するビオトープがあり、校舎は豊かな森林に囲まれている。

平成24年度からは、小規模特別認定校として市内の全地域から通学も受け入れている。この制度で入学している生徒は、全体の7割である。生徒は異なる地域で育った経験を互いに認め合い、高め合いながら、郷土成木を愛し、たくましく成長をしている。少人数の特性と地域資源を活かした体験や、生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばす教育を展開することで、生徒の心理的安定が保たれ、生徒の自己有用感が高い。地域住民は、「おらが学校」という誇りをもち、学校と協働して「森林学習」や「ホタル学習」等の「青梅学」を充実させている。総合的な学習の時間では、探究学習を導入している。生徒が個別の課題を主体的に設定し、課題解決を図るとともに、学年の枠を超えた課題別グループ学習を通して、社会課題に対する当事者意識を高め、探究心を育んでいる。



(青梅学：森林学習)

檜原村教育委員会

1 檜原村の紹介

都心からわずか2時間足らずで来ることのできる檜原村は、東京都の西の端にある大自然に包まれた山里である。耳を澄ませば小鳥のさえずり、小川のせせらぎが聞こえ、訪れる人々を楽しませている。また、山々に囲まれ、緑が多く空気は澄み、春は新緑、夏は谷間や樹間を通した涼風、秋は紅葉、冬は幻想的な氷瀑など、自然の恵みを堪能できるのが特徴である。

昭和25年7月10日に「秩父多摩甲斐国立公園」へ村の大部分が編入された。檜原村の総面積は105.41㎢、面積の93%が森となっており、東京都で3番目の広さとされている。

村内には、小学校が1校、中学校が1校あり、平成23年に、小中一貫教育校檜原学園檜原小・中学校を開園した。檜原村教育委員会では、村全体で「学びをつないで、持続可能な社会の創り手を育てる」ことを目標に、「9年間の系統性・連続性を意識した小中交流の充実」「ふるさと檜原学習の中心とした協働的探究学習」等を推進している。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 檜原村立檜原小学校



(檜原小学校)

学区域は村全域と広く、バス通学者が9割以上を占めている。令和7年度の児童数は57人、教職員数は14人である。檜原学園の小学校として、小・中学校の9年間の学びの連続性を意識しながら、小学校段階から、ICTを活用した個に応じた指導と協働的探究学習の充実を図っている。特に、郷土教育「ふるさと檜原学習」では、林業体験や野鳥観察、村在来植物「ムラサキ」の栽培等の体験活動を重視している。そして、檜原村の郷土に根ざし、ふるさと檜原を誇りに思い、大切にする心を育成できるよう、地域・保護者との連携を深め、地域の人材及び素材を生かした教育が特色である。

(2) 檜原村立檜原中学校

村内全域を学区域とし、バス通学者が約9割、自転車通学者が約1割である。令和7年度の生徒数は29人、教職員数は15人である。檜原学園の中学校として、小学校同様に9年間の系統性や学びの連続性を意識した指導を充実させるとともに、古典芸能などの郷土の伝統・文化に触れる機会を設け、郷土への誇りを育んでいる。また、卒業後の進学先が村外となる現状を見据え、「職場体験」に力を入れたり、国際理解教育を推進したりするなど、一人一人の生徒に寄り添った細やかな指導を行っている。将来、自らの人生を自分で切り拓く力を育成するためのキャリア教育が特色である。



(檜原中学校)

奥多摩町教育委員会

1 奥多摩町の紹介

奥多摩町は東京都の北西端に位置し、東京都の約 10 分の 1 に当たる 225.53 平方キロメートルの広大な面積を有する。全域が秩父多摩甲斐国立公園に含まれ、東京の奥庭として親しまれている。その大部分は山岳が占め、水道専用ダムとして東洋一の規模を誇る小河内貯水池（奥多摩湖）を有する。人口は約 4,500 人であり、山村の文化伝承が今でも大切にされ、郷土芸能の宝庫といわれている人と自然が調和した潤いのある町である。



(国指定重要無形民俗文化財
ユネスコ無形文化遺産
「小河内の鹿島踊」)

奥多摩町教育委員会は、次代の町を担っていく人材の育成を目指し、子供たちの「生きる力」を育むため、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」を育成する教育の充実を推進している。学校、家庭、地域が連携し、生涯を通じて学び支え合うことのできる地域社会の実現を目指している。

2 管内の学校における教育の特色

管内には、小学校が 2 校（古里小学校・氷川小学校）、中学校が 1 校（奥多摩中学校）ある。児童数は約 140 人、生徒数は約 70 人である。

全校がコミュニティ・スクールとして、保護者・地域住民と教職員が連携を図り、地域に開かれた学校づくりに向けて取り組んでいる。奥多摩町の自然や文化等の教育資源を積極的に活用しており、地域住民と積極的に関わりながら、各種体験学習等を充実させている。同時に児童・生徒の興味関心を高め、郷土を大切に思い、地域に貢献しようとする子供の育成を目指している。

学校教育の指導目標には、「通いたい、通い続けたい、通わせたい学校へ」を掲げ、小・中学校の連携した指導を大切にしている。小学校間では、日常的な交流学習や合同での移動教室、小・中学校間では、中学校教員による出前授業や中学校体験を実施している。また、授業公開や情報交換を行う小・中学校の全教職員が参加する交流会が年 3 回計画されており、町全体が一体となった教育活動の実践を重ねている。



(奥多摩町立古里小学校)



(奥多摩町立氷川小学校)



(奥多摩町立奥多摩中学校)

東京都教育庁大島出張所

1 大島出張所の紹介

大島出張所は、伊豆諸島の北部に位置する大島・利島・新島・式根島・神津島の5島、1町3村（小学校6校・中学校6校・義務教育学校1校）を所管している。

東京都及び管内町村教育委員会の教育目標及び各学校の教育目標の具現化を目指し、関係諸機関との連携を図りながら、管内各校の教育環境を踏まえ、島しょの抱える教育上の課題を的確に把握し、各学校教育の充実に必要な指導事務事業に基づき支援を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 大島町

児童・生徒の学力の向上を図るため、大島町教育委員会は、令和6年度より大島町研究推進校を設置した。指定を受けた小中各1校が、小中連携を行いながら実践的な研究を進め、町内全校にその効果の普及を図っている。令和7年度は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点を設け「学び続ける児童・生徒の育成」を目指している。



(大島波浮港)

(2) 利島村



(利島小中学校)

令和7年3月に愛知県瀬戸市の学校法人SOLAN学園と村が連携協定を結び、児童・生徒の「短期交換留学制度」や教員同士の交流を行っている。都市部と島しょ部という異なる環境で教育を行う教員同士が意見を交わし、指導方法を共有したり、互いの校内研修に参加し合ったりすることなどを通して、教育の質の向上を図っている。

(3) 新島村

「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」を目的に、11の部会から成る「新島村連携型一貫教育研究協議会」を設置し、「新島村連携型一貫教育」に取り組んでいる。保育園・小学校・中学校・高等学校の卒園・卒業時における目指す子供の姿をそれぞれ設定し、異校種間の教育連携・交流の研究及び推進を行い、児童・生徒の主体性を高め、可能性を最大限に伸ばす教育を目指している。



(新島村宮塚山から)

(4) 神津島村



(神津小学校)

小学校における教育と中学校における教育を円滑に接続させるために、平成24年度より「神津島村小中連携協議会」を設置している。令和7年度は、「学びに向かう力」部会を新設し、令和の日本型学校教育の構築を目指して「神津島村授業基本モデル」を再構築し、小学校から中学校までの9年間の学習ガイドラインを統一する予定である。

東京都教育庁三宅出張所

1 三宅出張所の紹介

三宅出張所は、東京都心から南方約 180 キロメートルの伊豆諸島南部に位置し、三宅島と御蔵島の 2 島、2 村を所管している。管内には、小学校 2 校、中学校 2 校があり、児童約 130 人、生徒約 50 人が在籍している。

当出張所では、東京都教育委員会、管内各村教育委員会及び各校の教育目標の実現に向けて、教育庁指導部、教職員研修センター等と連携し、指導事務事業を展開している。なかでも、児童・生徒の情報活用能力の向上を図るため、「GIGA スクール構想」の確実な実施と『『未来の東京』戦略』に掲げる東京型教育モデルの実現に向け、教育庁総務部デジタル推進課や指導部義務教育指導課及び他の島しょ地域と連携して、教員の ICT 活用指導力の向上を図り、各校の教育 DX を推進している。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 三宅村

平成 12 年の噴火による全島避難後、学校の統廃合が行われ、現在、村内は小学校、中学校ともに 1 校ずつとなっている。

三宅村立三宅小学校、三宅村立三宅中学校に三宅村立みやけ保育園、東京都立三宅高等学校を加えた「保小中高一貫教育」を推進し、各教育機関の教育課程を連携させることで、児童・生徒がスムーズに次の段階へ進むことができるよう努めている。



(三宅小学校)



(三宅中学校)

また、教育の質向上を目指し、研究の中核となる教員を育成するために、「三宅村教育研究員」を設置している。令和 6 年度は、「意欲的に取り組む児童・生徒の育成」と小中共通の主題を立て、2 名の教員が教育研究員として研究を行い、三宅村教育研究発表会で研究成果を報告した。

(2) 御蔵島村

御蔵島村立御蔵島小学校、御蔵島村立御蔵島中学校の 2 校がある。これらの学校は、小中併設校でもある。島内に高等学校がないことから、児童・生徒は、中学校の卒業と同時に「15 歳の旅立ち」を迎えることが多い。

御蔵島小学校及び中学校では、異学年や異校種との合同授業や交流活動等、小中併設校の特性を生かした 9 年間の教育活動の一貫性と継続性を重視し、組織的・計画的な取組を行っている。また、動植物等、御蔵島の自然環境をテーマとした学習を進め、御蔵島の特色を理解するとともに、島の未来について考える「御蔵みらいの日」を設定している。さらに、毎月 5 の付く日には、昭和初期から続く「奉仕日」として、早朝から児童・生徒が、郷土の美化に貢献している。



(御蔵島小学校)
(御蔵島中学校)

東京都教育庁八丈出張所

1 八丈出張所の紹介

八丈島は、東京都心から南方約 287 キロメートルの海上に位置し、面積 69.1 平方キロメートル、周囲 58.91 キロメートルのひょうたん形の島である。八丈町の人口は 6,741 人、世帯数は 4,109 世帯である。(令和 7 年 5 月 1 日現在)。青ヶ島は八丈島の南方約 70 キロメートルに位置し、面積 5.96 平方キロメートルの楕円形の島である。青ヶ島村の人口は 161 人、世帯数は 114 世帯である(令和 6 年 10 月 1 日現在)。

管内には小学校 4 校(八丈島 3 校、青ヶ島 1 校)、中学校 4 校があり(八丈島 3 校、青ヶ島 1 校)、教職員数は 109 人、児童数は 321 人、生徒数は 136 人である(令和 7 年 4 月 1 日現在)。

八丈出張所では、学校及び教職員の抱える様々な課題に対応するために、管内の小・中学校において教職員研修センターによる都教委訪問や、島しょ地域研修支援事業を活用し、喫緊の教育課題や各校の要望に応じた研修機会の充実を図っている。

令和 7 年度は、八丈町教育委員会、青ヶ島村教育委員会と連携して、オンラインを活用した八丈町と青ヶ島村の教員が共に学べる場を設定し、デジタルツールの活用や教育 DX の活用に関する研修を設定するなど、教育課題への対応力の強化や個別最適な学びと、協働的な学びの実現へとつながる教員の資質・能力の向上に対する支援を行っている。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 八丈町立学校における特色

島の中央部に当たる八丈富士と三原山の間は、島の経済活動の中心地であり、島全体の児童・生徒の 8 割以上が居住している。住民の連帯感は島全体で強く、学校教育に対して協力的で、学校行事への地域住民参加も積極的である。

八丈町の学校は全校単学級であるが、小規模校の特色を生かして、児童・生徒一人一人の習熟度に合わせたきめ細かな指導を行っている。

また、各小中学校ではデジタル技術を学習活動に活用し、児童・生徒が自ら学び方を選択し、自立した学習者になることを目指した授業づくりに関する研究に取り組んでいる。



(2) 青ヶ島村立学校における特色



(青ヶ島全景)

青ヶ島小学校は明治 7 年 1 月 15 日に開校、青ヶ島中学校は昭和 22 年 4 月 1 日に創立された。村の人々にとって、古くから学校は特別な存在であり、その意識は現在も続いている。地域で子供を育てるという文化が根付いており、学校教育に対して協力的である。

総合的な学習の時間で、小学校では、島の特産である「かんも(さつまいも)」を育て収穫する活動、島の動植物等について学ぶ学習、中学校では、これからの青ヶ島の自然・歴史・暮らしに関する課題解決学習に取り組んでいる。

東京都教育庁小笠原出張所

1 小笠原出張所等の紹介

小笠原諸島は、都心から南に約 1,000～1,900km の太平洋上に散在する 30 余の島々で、一度も大陸と陸続きになったことのない海洋島である。現在、人々が暮らしているのは父島（約 2,000 人）と母島（約 400 人）で、村立学校は 3 校（小笠原小学校、小笠原中学校、母島小中学校）が設置されている。



（父島二見港）

小笠原出張所は、多くの関係者の皆様の御尽力により、令和 6 年 4 月に開設した。総務局小笠原支庁内に事務所を置き、所長、副所長、職員 4 名の計 6 人体制で、教職員研修の企画・運営、教育に関する事務の指導・助言のほか、管内村立学校の教職員の人事、教職員住宅の維持管理、社会教育の振興、村内文化財の保護等に関する事業を行っている。

なお、現在父島では小笠原小学校、中学校の校舎の建替え事業を進めており、本事業完了後には、全ての村立学校が施設一体型の校舎となる。

2 管内の学校における教育の特色

(1) 小中一貫教育の推進

小笠原村教育委員会では、小中一貫教育の一層の充実を教育施策の中心に据えて取り組んでいる。設置 3 年目を迎えた「小笠原村立学校小中一貫教育推進協議会」を中心として、下部組織に三委員会（授業研究推進委員会、教育 DX 推進委員会、義務教育学校在り方検討委員会）を設け、村立学校に所属する全ての教職員による小中一貫教育推進体制を確立している。

令和 7 年度から、母島小中学校が義務教育学校となった。小笠原小学校と小笠原中学校も義務教育学校化に向けて、母島小中学校での実践を基に検討を進めていく。

また、各校では、義務教育 9 年間の体系的な学びの実現を目指し、各教科等の年間指導計画を「内容のまとめり」ごとに再編する作業に取り組んでいる。

(2) 「小笠原学習」の取組



（母島沖港）

従来から単発的な取組として行われていた地域学習を令和 4 年度、「小笠原学習」としてまとめた。学年ごとにテーマを設け、生活科や総合的な学習の時間を中心に学習活動を展開している。

また、児童・生徒が中学校卒業時まで目指す姿を資質・能力の視点で具体的に表し、その実現に向けた取組を体系化できるよう、教育活動の充実を図っている。

さらに、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れ、教育活動を RPDCA サイクルに基づき実践し、成果と課題をもとに教育内容や指導計画等の改善・充実を図りながら、未来の小笠原村を担う人材として、児童・生徒に必要な資質・能力の育成に取り組んでいる。

令和7年度
へき地・小規模校教育研究発表会
第28回 研究発表会資料

東京都教育委員会
東京都へき地教育研究協議会
令和7年8月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 03-5000-7064

